



日時	2026年5月1日 14:00				試合形式	45分×2set 20分×1set			
会場	さくらスタジアム				ピッチ状態	天然芝			
日本代表			3	0 1set 3 1 2set 6 2 3set 3	12	矢板中央			
警告・退場	3set	2set	1set	チーム合計		1set	2set	3set	警告・退場
	4	2	6	12	シュート	30	7	18	5
	0	6	4	10	GK	14	8	6	0
	1	0	0	1	CK	10	1	5	4
	0	5	4	9	直接FK	2	1	1	0
	1	2	1	4	間接FK	1	0	1	0
	1	2	1	4	(オフサイド)	1	0	1	0
	0	0	0	0	PK	0	0	0	0

【日本】

1 set



2 set



3 set



【矢板中央】

1 set



2 set



3 set



## 【得点経過】

### 1 s e t

2 8 分[矢板中央]  
3 6 分[矢板中央]  
4 2 分[矢板中央]

### 2 s e t

4 8 分[矢板中央]  
5 3 分[矢板中央]  
6 3 分[矢板中央]  
7 0 分[日本]幾島の FK を吉川がヘディングで合わせてゴール。  
8 8 分[矢板中央]  
8 9 分[矢板中央]  
8 9 分[矢板中央]

### 3 s e t

3 分[矢板中央]  
6 分[矢板中央]  
7 分[日本]横井がペナルティーエリア外からダイレクトシュート。  
1 4 分[矢板中央]  
1 6 分[日本]福原のインターセプトから、自らシュートを放ちゴール。

## 【交代】

### 2 s e t

6 1 分[矢板中央]	IN	NO.74	⇔	OUT	NO.13
	IN	NO.17	⇔	OUT	NO.39
	IN	NO.14	⇔	OUT	NO.7
	IN	NO.31	⇔	OUT	NO.89
	IN	NO.30	⇔	OUT	NO.39
6 4 分[日本]	IN	福原	⇔	OUT	池上
8 3 分[日本]	IN	下鶴	⇔	OUT	武田
	IN	松野	⇔	OUT	奥田
8 3 分[矢板中央]	IN	NO.60	⇔	OUT	NO.7
	IN	NO.14	⇔	OUT	NO.39
	IN	NO.21	⇔	OUT	NO.7
	IN	NO.64	⇔	OUT	NO.89
	IN	NO.32	⇔	OUT	NO.81
9 0 分[矢板中央]	IN	NO.74.	⇔	OUT	NO.35

### 3 s e t

7分[日本]	IN	結城	⇔	OUT	佐藤
9分[日本]	IN	福原	⇔	OUT	池上
11分[日本]	IN	梅村	⇔	OUT	越智

### ゲームコンセプト

#### 全員攻撃/全員守備、良い守備から攻撃へ、90分 total の戦い

#### 攻撃コンセプト

- ・中央突破(2人はDF間突破+3人コンビネーション)
- ・サイド崩し(ソロ)(コンビネーション)(ニアゾーン)  
→ニア・プルバック・ファー
- ・ビルドアップ  
→少ないタッチ+パススピード(サイドチェンジ・意図的な緩急)+サポート

#### 守備コンセプト

- ・1 vs 1 で絶対に負けない
- ・前線、中盤の守備、ゴール前の守備 (PAに入らない・2ブロックコントロール)
- ・クロス対応 (同一視・人をつかまえる・ボールに寄せる・GKと連携)
- ・プレスバック

#### 切り替え

- ・【守→攻】カウンター、1タッチプレー、直線(逆サイド)に飛び出す、インターセプトパス
- ・【攻→守】状況に応じ「ゴールを守る」が優先

### ゲーム内容

雨の影響により、ピッチコンディションはスリッピーな状況で試合が行われた。

本試合は90分+延長戦を想定し、3セット形式で実施。控え選手を含めたトータルでゲームに勝つことを目標に臨んだ。

日本代表は、高い位置から積極的にプレッシャーをかけ、良い守備から攻撃につなげることを狙いとして試合に入った。前半立ち上がりは、相手ビルドアップに対して1st DFが機能し、高い位置でボールを奪う場面を作ることができた。

しかし、時間の経過とともに運動量が低下すると、相手に対する1st DFが遅れ始め、守備の連動性に課題が見られるようになった。相手に自由にボールを前進させられ、ライン間を効果的に使われることで、ゴール前まで侵入を許す場面が増加した。前半28分には、プレッシャーが遅れるエラーなどが重なり、中央突破から失点。さらに、その直後にはバックパス時の連係ミスから連続失点を喫した。加えて42分には、クリアミスを相手に拾われ、追加点を許した。前半は、自分たちのミスから試合の流れを悪くしてしまう展開となった。

後半はポジション変更を行い、新たな組み合わせを試しながら臨んだ。引き続き前線からの守備を試みたものの、相手にプレスを外される場面が多く、守備が後手に回る展開となった。特にサイドスペースを効果的に使われ、相手に起点を作られる場面が目立った。コーナーキックから失点すると、その後もクロスボール対応で連続失点。攻撃面では相手守備を崩し切れず、決定機を多く作ることができなかった。

3セット目は、攻撃時にシンプルに前向きなプレーを選択する場面が増え、複数得点を奪うことができた。守

備の時間帯が長く、走行距離も増加したことで体力的に厳しい状況となったが、選手たちは最後まで集中を切らさず、粘り強くゲームに取り組んだ。